

語り継ぎたい

昔ばなしの

お子さんや
お孫さんへの
読み聞かせにも!



最後に本を読んだのは、いつですか?

「忙しいのに読書なんて…」と思うかたもいるかもしれませんが。

しかし、本から日常のヒントを得たり、刺激を受けたりすることは多いもの。

「読む習慣」は、あなたの心や、人生をも豊かにしてくれるはずですよ。

今回は、この町にまつわる昔ばなしを、3話用意してみました。

最近、活字を読んでいないかたにも親しみやすい、短いおはなしです。

秋の夜長、久々に物語を読んで、ホッと一息ついてみませんか。

金田屋敷のおはなし

これはまだ福岡県が「筑前国」「豊前国」「筑後国」という3つの国にわかれていたころのおはなしです。

ある年の夏、大地を揺るほどの豪雨が金田村を襲いました。

「こりゃあものすごい雨じゃが。なんもなからなイイばってん…」

金田村宮床の川岸近くで暮らす2軒の村人の心配をよそに、

雨は毎日降り続け、ついに彦山川が大氾濫してしまいました。

濁流は一瞬のうちに2軒の家を襲い、家の中の人たちもろとも、あつという間に押し流してしまつたのです。

家の人たちはなすすべも無く、屋根裏の梁にしがみつぎ、おびえながら無事を祈るしかありませんでした。

「暴れ川」で有名だった彦山川。

当時は流れをせき止める井堰や橋などの障害物もなく、

2軒の家は、大破することなく川下へ流されていきました。

「ここはどこやろか…」

ようやく流れ着いた場所は、現在の直方市中泉付近。

2軒の家は、金田村や草場村のある豊前国の国境を越えて、

中泉村のある筑前国まで流されていたのです。



宮床(彦山川・中元寺川合流点付近)から家が流されたとされる現在の福智町と直方市の境。「金田屋敷」と呼ばれているのは川の西側で、東側には「国境石」があります。

当時の農民の間では、国を越えて移住するということは、考えられないことでしたが、大水害に遭いながらも生きのびた2軒の家の人たちを、筑前国の人たちは「人間業を超えた天の所業」として咎めず、金田村の彼らが筑前国にとどまることを、黙認することにしました。

この2軒の家は、金田村からの飛び地にしては離れ過ぎていたため、

国境に一番近い「豊前国草場村」の「国境を越えた飛び地」として落ち着きました。

その後、現在の直方市の「金田屋敷」と呼ばれる地域になったということです。



宮床(彦山川・中元寺川合流点付近)から家が流されたとされる現在の福智町と直方市の境。「金田屋敷」と呼ばれているのは川の西側で、東側には「国境石」があります。